

私たちのプロジェクトは、「アラビア海東域の港湾都市をめぐる文化・民族複合の実態調査」と題している。本プロジェクトでは、海路による交易を媒介にして種々の文化・民族が集積させてきた、アラビア海東域の沿海都市における文化・民族複合に注目し、学際的な考察を通してその実態を解明しようとする。これらの地域では、特にポルトガルの進出がヨーロッパ世界とインド世界との直接的な交易と文化接触を生じさせ、今日のコスモポリタニズムにつながる文化・民族の融合や対立の諸関係をつくりだしてきたといえよう。二〇〇一年度は、ヨーロッパ人がもたらした文化の変容と継承、他の諸文化との融合、受容、対立などの諸関係について、主に宗教と生活文化をめぐって、観察と聞き書きによる予備的な実地調査を行なった。

調査は、インド・スリランカ・グループ（澁谷利雄、スワン・ワジラチャリヤ、川島耕司）とイラン・グループ（村山和之、山内和也、前田たつひこ）に分けて実施した。

スリランカ・インド・グループは、二〇〇一年一二月下旬から二〇〇二年一月初旬にかけて、約二週間にわたって実施調査を行なった。

澁谷は、スリランカのコロンボ近郊のジャーエラで、クリスマスの見聞を行なった。ポルトガル人の布教活動により一六世紀からキリスト教が定着している。とりわけ西部沿海地方の漁民に多くみられる。仏教の伝統のなかで殺生が否定的にみなされてきたために、漁民の多くが改宗したといわれている。その後オランダ、イギリスの支配が続くが、今日に至るまでキリスト教徒のほとんどはカトリックである。ちなみにジャーエラのジャーとはジャワを指している。オランダ時代に当地ではジャワ人を投入して運河を掘ったことに由来するのだという。

キリスト教徒は全人口の七・六パーセントを占めており、そのうちシンハラ語を母語とする者は

民族的にはシンハラ人とされている。シンハラ人は七〇パーセントを占める多数民族で、そのほとんどは仏教徒である。キリスト教徒の民族的アイデンティティの危うさが想像できる。

川島は、インド南部のケーララ州で、クリスマスをめぐるキリスト教とヒンドゥー社会のかかわりをテーマにして取り組んだ。ケーララでは早くも三世紀ころからシリア派キリスト教徒が独自の社会を形成していた。これに加えて、一六世紀に進出したポルトガル人が布教したため、今日キリスト教徒は州人口の二〇パーセント以上に上る。今回はポルトガルの拠点であったコチを主に見聞した。

概してケーララでは長年にわたって、反キリスト教運動はなかったのだが、近年のヒンドゥー至上主義の台頭によりいくぶん変化が生じている。一九九九年にクリスマス集会に対する襲撃や、ペントコスタル教会への放火などの暴力行為が報告されている。

ワジラチャリヤは、スリランカのマレー系コミュニティの実態調査に取り組んだ。その多くはオランダ植民地時代（一七一一―一八世紀）に傭兵や労働力として現在のマレーシアやインドネシア方面から導入された人びとの子孫である。今日のセンサスによれば、全人口の〇・三二パーセントを占めている。一九六〇年代ころまでマレー語の新聞が発行されていたが、英語使用者が増加したり、シンハラ人やタミル人との結婚が増えたことにより、マレー語使用者は減少している。かつてはコロンボのスレイブ・アイランド地区に多く集住していたが、その後各地に散住している。そうしたなかで唯一、南部のキリンダにマレー人漁民社会が存続しており、興味深い。最近では、現在多数ある小規模な互助的なマレー人組織を統括しようとする動きがみられる。シンハラ、タミル間の抗争と多民族社会での競合のなかで、イスラーム教を軸にマレー人としてのアイデンティティを再構築しようとするものである。

前述のジャーエラを初めとして、コロンボ市内のジャーワッタ通りやマレー通り、ジャフナ半島のチャーワー・カッチエーリ（チャーワーはジャワに由来する、という説がある）など、オランダの植民地支配とマレー・コミュニティの存在は、スリランカの文化・社会に深く刻まれている。同様に、ポルトガル語に由来する人名や生活語彙、カトリックの存在は、ポルトガルの関与の深さを

まざまざと示している。インドやスリランカの港湾都市を取り上げる場合、依然としてヨーロッパとの文化接触の考察は不可欠といふべきである。

イラン調査グループは、アラビア海からオマーン湾湾としてペルシア湾沿岸地域に点在する港湾都市を対象に、ポルトガルを初めとするヨーロッパ諸国との文化接触の痕跡を確認するべく行動した。参加者は、村山和之（民俗文化）、山内和也（考古、言語）、前田たつひこ（歴史、宗教）で、二〇〇二年二月～三月にかけて三週間にわたって調査に従事した。陸路でペルシア湾最奥のフゼスターン州都アフワーズから、湾の出入り口にあたるホルムズガン州都バンダレ・アッパースまでの港湾都市を探訪した。イスラーム時代を含む旧来の都市遺跡の記録作業から始まり、要塞や湾岸特有の宗教施設（聖廟、墓地）を含めた建造物とともに、文献・画像・衣装・楽器・遺物などの収集を行なった。

今回の調査からは、対象地域にはキリスト教など定着したヨーロッパ文化、またはその深い影響はみられなかった。海岸線などにポルトガル時代の要塞が残り、各地に彼らに導入されたアフリカ系黒人の子孫がみられ、イギリス時代の商館建築にわずかにヨーロッパ的デザインがうかがわれる程度である。こうしたなかで、オマーン湾沿岸のマクラーン地域で興味深い伝承を採集することができた。ポルトガル人と戦って名譽の死を遂げたバローチ民族の英雄を称える民俗芸能である。

「ヨーロッパ」をキーワードとした今回の調査からは、ペルシア湾交易の長い歴史においては、一時的に勢力を維持したにすぎないヨーロッパ文化の影響力の弱さと、イラン文化の豊かさや強さが対照的にみとれた。今後の展望としては、イラン南東部からパキスタン南西部への踏査を通して、アラビア海沿岸文化ベルトを追究したいと考えている。

「本プロジェクトにはこのほか、前田耕作、川添修司、松枝 到、佐川信子が参加した。」